日本語学会
2015年春季大会報告

博士前期課程2年　森貝聡恵

日程

第100回方言研究会
・5月22日(金)　＠甲南大学

午前の部
基調講演：日本方言研究会の50年をふり返る　佐藤亮一
企画展示「方言研究の歩み」紹介　都染直也
創立50周年記念企画「全国方言YEAR　方言研究を未来につなぐ」紹介
スライドショー：日本方言研究会の50年　※ポスター発表と並行開催

日程

午後の部　シンポジウム：方言研究の過去・現在・未来

研究動向の分析
・第1期（1～19回：1965～1974年）　井上史雄　・第2期（20～39回：1975～1984年）真田信治
・第3期（40～59回：1985～1994年）木部暢子　・第4期（60～79回：1995～2004年）大西拓一郎
・第5期（80～99回：2005～2014年）小西いずみ

隣接他分野の研究動向と方言研究との接点
・文献国語史と方言研究の接点　青木博史
・社会言語学と方言研究の接点　松本和子
・民俗学と方言研究の接点　島村恭則

総合討論

日程

日本語学会2015年春季大会
5月23日(土)～5月24日(日)　＠関西学院大学　西宮上ヶ原キャンパス

5月23日
口頭発表

5月24日
ブース発表
シンポジウム
ワークショップ

口頭発表紹介

「中古和文の準副体助詞と連体助詞
—現代語の準副体助詞との対照—」

富岡宏太・林田明子(國學院大學大学院生)

発表の目的

準副体助詞とは・・・格助詞に後接した連体助詞ノ (橋本 1948)。

(1) 父からの手紙
(2) 東京ドームでのコンサート

「連用格表示型」

「格助詞＋準副体助詞」の例は古代語にもみられる。

(3) ……、御簾と几帳との中にて、……。 (枕草子100段、203頁)
(4) ……、はじめよりのことうち思ひ出でられて……。 (源氏物語、夕顔、①170頁)

発表の目的

これまでの研究では・・・
・古代語では現代語ほど連用格表示型は用いられていなかった(橋本 1969)。
・一方、連用格表示型が用いられる領域/用いられない領域の違いは部分的。

本研究では・・・
・中古和文のおける連用格表示型の使われる領域を、現代語と対照させて明らかにする

現代語の「連用格表示型」の使われる領域を、
中古和文では連体助詞が担っていたことを主張

現代語における用法（調査方法）

対象・・・ヘノ・カラノ・デノ・トノ

方法・・・現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)「中納言」で検索
得られたデータからランダムに1000例ずつ、計4000例を抽出

準副体助詞に前接する格助詞ごとに、
共起例の多い後接名詞上位10語を調査

現代語における用法

表1：現代語の「連用格表示型」の後接名詞上位10語（同数の場合は切り上げ）

助詞	後接名詞
へ	対応、影響、参加、以降、手紙、関心、支援、転換、配慮、愛
カラ	輸入、お知らせ、メッセージ、手紙、情報、脱却、電話、意見、眺め、撤退
デ	【場所】活動、検討、研修、仕事、取組み、承認、生活、表示、作業 【道具】申し込み、来場
ト	【並列・共同】関係、あいだ、連携、交流、戦い、かかわり、関連、約束 【引用】認識、指摘、情報

富岡・林田(2015: 66)

現代語における用法(ヘノ)

「ヘノ」

前接名詞句→　着点となる場所や人

後接名詞句→　①移動物を指す名詞　②動作を表す動名詞

(5) 光子は、主人の高木ハツへの手紙を読み返し、……。　(宮本輝1989『夢見通りの人々』)

(6) 国民一般には、政治への参加の機会さえ与えられなかったばかりか、……。

(吉田春樹1995『「経済大国」に明日はないか』)

現代語における用法(カラノ)

「カラノ」

前接名詞句→　起点となる場所、人

後接名詞句→　①移動物を指す名詞　②動作を表す動名詞

(7) 死んだ昭子からの手紙である。　(斎藤栄1990『日美子の歌麿殺人』)

(8) ……、両地域からの輸入がともに増加した。　(「1988年度通商白書)

現代語における用法(デノ)

「デノ」

前接名詞句→　①場所　②手段・道具

後接名詞句→　前接名詞句が　①場所の場合：動名詞 or デキゴト名詞

②手段・道具の場合：動名詞

(9) 会社での仕事と並行して……。　(藤江俊彦2005『キャリアは自分で作れ』)

(10) 電話での申し込みはできません。　(「ちば市政だより若葉区版」2008年3号)

現代語における用法(トノ)

「トノ」 ・・・【並列・共同】と【引用】の二つ

【並列・共同】
後接名詞句→ 関係を表す名詞、動作を表す動名詞

(11) そうすると、その一部の個体ともとの集団(母集団)との間の差がしだいに増幅されて、……。
(上田誠也2006『理科基礎 自然のすがた・科学の見かた』)
(12) これも妻との約束だ。 (山之内三紀子1999『サラリーマンの落とし穴』)

前接名詞句→ ①関係する人や物を指す複数の名詞がトノの前にすべて表示される＝「全項表示」
②視点人物でない方を指す名詞のみがトノの前に表示される＝「一項表示」

現代語における用法(トノ)

【引用】
・・・前接句 ： 用言を主要部とする句が前接する。
後接名詞 ： 「意見書」「指摘」といった伝達にかかわる名詞
「認識」など知覚に関わる名詞

(13) 従来から、建設産業については、規模のメリットが働かず、合併などの再編が怒り得ない、あるいは起こりにくいとの指摘がなされてきた。
(建設業再生・再編研究会編 2003『建設業の再生・再編ハンドブック』)

現代語の用法

表2:「連用格表示型」の前接名詞句・後接名詞句の特徴

	ヘノ		カラノ		デノ		トノ		
前接名詞との格関係	着点		起点		場所	手段・道具	並列・共同		引用
							全項	一項	
後接名詞	モノ	動作	モノ	動作	コト	動作	関係・動作		伝達・知覚

富岡・林田(2015: 67)

中古和文における用法(調査方法)

対象・・・竹取物語、土左日記、大和物語、落窪物語、枕草子、
源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記
(本文は小学館の新編日本古典文学全集による)

方法・・・日本語歴史コーパスで検索

中古和文における用法

結果・・・ ヨリノ: 17例
トノ : 11例

トテノ: 4例 →中古和文特有の形式で、対照が難しいため除外

カラノ: 3例 →中古和文のカラの用法が現代語と異なる(石垣謙二1955)ため除外

※ヲノ(3例)のヲはいずれも間投助詞で除外。

中古和文における用法(ヨリノ)

「ヨリノ」 → 現代語で相当すると考えられる「カラノ」といくつかの点で異なる

前接名詞句→ 時間を表す語に限られる(中村幸弘1985)。
後接名詞句→ 視点人物に向かっていくモノや人を表していない。

(14) 野山のけしきを見るにつけても、いにしへよりの古事ども思い出でられて、
ながめ暮らしてなん来着きける。 (源氏物語、東屋、⑥89頁)

(15) もとよりのよすがなどもあれば、……。 (枕草子、274段、426頁)

中古和文における用法(ヨリノ)

ただし、現代語でも視点人物以外に向かっていくモノや人を表す名詞が後接する例はある。

(16) ……、小学校、中学校からの友達。 (斎藤環2001『若者のすべて』PHP研究所)

(17) 少年の時からの夢が、一瞬にして、挫折したんだからね。
(西村京太郎2004『怒りの北陸本線』)

★ 中古和文においては後接名詞が視点人物に向かっていくモノや人を表した例が見られず、その点で現代語に比べ用法が狭い

中古和文における用法(トノ)

「トノ」 → 中古和文では【並列・共同】の例のみ。

(18) ……、武蔵国と下総国とのなかにいと大きなる河あり。 (伊勢物語、122頁)

(19) 北の御障子と御張とのはざま、いとせばきほどに、四十余人ぞ、後に数ふればゐたりける。
(紫式部日記、133頁)

(20) ……かの母北の方(＝葵の上)の、伊勢の御息所(＝六条御息所)との恨み深く、いどみかはしたまひけむほどの御宿世どもの行く末見えたるなむさまざまなりける。
(源氏物語、若菜上、④102頁)

→ (18)(19):「全項表示」
(20) :「一項表示」→ 後接する動名詞「恨み」の格関係を明らかにするためトが明示されたと考えられる

中古和文における用法（まとめ）

表3: 中古和文の「連用格表示型」

	ヘノ		カラノ		デノ		トノ		
前接名詞との格関係	着点		起点		場所	手段・道具	並列・共同		引用
							全項	一項	
後接名詞	モノ	動作	モノ	動作	コト	動作	関係・動作		認識・知覚
用例の存否	×	×	○	×	×	×	○	△	×

(富岡・林田2015: 69)

＊○＝3例以上/ △＝孤例/ ヨリノ＝起点となる前接名詞が時間名詞のもののみ

中古和文における連体助詞

現代語においては・・・

「連用格表示型」が使用されるのと同じ文脈で

連体助詞が使用される場合がある(張佩霞 2002、加藤重広 2003)

(21) それはあなたの手紙がこちらに着かなかったか、……。 (村上春樹1990『遠い太鼓』)

(22) 老人は……、孫のプレゼントを買い、……。 (竹内宏2002『路地裏の「名老」学』)

中古和文でも連体助詞を「連用格表示型」と同文脈で用いることがあったのか？

中古和文における連体助詞(「への」)

「への」相当の「ノ」

・・・「への」の表す領域は連体助詞ノが担っていた(中村幸弘1985、小田勝2010)。

(23) 朱雀院の行幸 (源氏物語、若紫、中村幸弘1985の挙例)

(24) 匣殿は、二月に尚侍になりたまひぬ。院の御思ひに、やがて尼になりたまへる(尚侍ノ)かはりなりけり。 (源氏物語、賢木、小田勝2010の挙例)

(25)(夕霧ハ)心もそらにおぼえて、あなた(＝一条御息所)の御消息通ふほど、……。 (源氏物語、夕霧、小田勝2010の挙例)

中古和文における連体助詞(「よりの」)

「よりの」相当のノ

・・・後接名詞がモノを表す名詞の場合には指摘されている(中村幸弘1985)

今回の調査では、後接名詞が動名詞の例も確認！

(26) 姫君(＝紫上)の御文は、……。 (源氏物語、須磨、中村幸弘1985の挙例)

(27)〔源氏→明石入道〕「嵯峨の御伝えにて、女五の宮さる世の中の上手にものしたまひけるを、……。 (源氏物語、明石、②242頁)

(28) この御前なる人も、姉君の伝えに、あやしくて亡くせたる人とは聞きおきたれば、それにやあらんとは思ひけれど、……。 (源氏物語、手習、⑥347頁)

中古和文における連体助詞(「との」)

「との」相当のノ

・・・「全項表示」は「AトBトノ」の形でしか見られなかった。

一方、「一項表示」の「との」相当のノは次のような用例が見られた。

(29) (女三宮ハ)おはします寝殿(ヲ女二宮ヘ)譲りきこゆべくのたまへど、(薫ハ)「いとかたじけなからむ」とて、御念誦堂の間に、廊を続けて作らせたまふ。 (源氏物語、宿木、⑤476頁)

(30)〔浮舟母→薫(消息)〕「……年ごろは、心細きありさまを見たまへながら、それは数ならぬ身の怠りに思ひたまへなしつつ、かたじけなき(薫ノ)御一言を、行く末長くの契りもいと心憂く悲しくなん。……」 (源氏物語、蜻蛉、⑥240頁)

(31)〔薫〕≪……(浮舟ニツイテノ話題)……≫と≪いみじう憂き水の契りかな≫と、この川の疎ましう思さるることいと深し。 (源氏物語、蜻蛉、⑥235頁)

中古和文における連体助詞(「との」)

直前に、話題の中心となるモノや人物について述べられている。

→ 文脈的な支えがこれらの表現を成立させている。

【引用】の「との」相当のノ

(32) 明けぬれば、わたらむのいそぎしたまふ。 (落窪物語、巻之四、324頁)

(33) 人目にこそ変ることなくもてなしたまひしか、内にはうきをしりたまふ気色しるく、こよなう変りにし御心を、いかで見えたてまつらじの御心にて、…… (源氏物語、鈴虫、④380頁)

→ ム・ラム・ジといった、推量・意志の助動詞、願望の終助詞バヤで終わるものに限定される(浅見徹1959、信太知子2004、小田勝2010)

中古和文における連体助詞(「にての」)

「にての」相当のノ

・・・【場所】を表す連体助詞

(34) かかる所の儀式は、よろしきにだに、いと事うるさきを、……。(源氏物語、梅枝、③413頁)

(35) 兵部卿宮、御前の御遊びにさぶらひたまひて、……。 (源氏物語、真木柱、③384頁)

・・・【手段・道具】に相当するものは、ノもニテノも確認されなかった。

→ 「ニテ＋動詞句」の形式のみが使用されていた？
例が見られなかったのは偶然？

中古和文における連体助詞(まとめ)

表4:「連用格表示型」と連体助詞の使用範囲

	「への」		「よりの」		「にての」		「との」		
前接名詞との格関係	着点		起点		場所	手段・道具	並列・共同		引用
							全項	一項	
後接名詞	モノ	動作	モノ	動作	コト	動作	関係・動作		伝達・知覚
連用格表示(現代)	○	○	○	○	○	○	○	○	○
連用格表示(中古)	×	×	△	×	×	×	○	△	×
連体助詞(中古)	○	○	○	○	○	×	×	○	△(*)

＊【引用】は前接句がムやジなど、意志・推量の助動詞を前接する場合のみ。

(富岡・林田 2015: 71)

連体助詞の表現領域の広さ

中古和文においては、現代語で「連用格表示型」が使用される領域のほとんどを連体助詞が担っていた。

→「連用格表示型」を用いなくても、連体助詞に前接する名詞と後接する名詞との意味関係を理解することが現代語より容易だったため

古代日本語では・・・

無助詞名詞句で様々な格関係を含意できた(小田勝2006)。

→「節と節の「意味」で関係を表示する言語」であり、格関係についても「節同士の意味関係に依存」しているため(青木博史2013)。

↓

今回の結果は、修飾・被修飾の関係にある二つの名詞句の間にも同様の関係が認められる可能性を示唆

まとめと主張

①中古和文の、準副体助詞による「連用格表示型」の用法が、現代語よりも狭いという橋本進吉(1969)の指摘を発展させる形で、具体的にどの程度狭いのかを明らかにした。

②中古和文では、「連用格表示型」が使用されない領域の多くを連体助詞が担っていたと考えられる。

③中古和文の連体助詞の用法の広さは、前接名詞句と後接名詞句との意味関係を、現代語よりも容易に理解できたためと考えられる。

参考文献

青木博史(2013)「“ストーリー”としての日本語文法紙」『日本語学会2013年度秋季大会予稿集』

浅見徹(1959)「絶えむの心わが思わなくに―陳述をめぐる問題―」『萬葉』第33号

石垣謙二(1955)『助詞の歴史的研究』岩波書店

小田勝(2006)『古代語構文の研究』おうふう

_____ (2010)『古典文法詳説』おうふう

加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房

信太知子(2004)『古代語における「といふ」型名詞節について―付「絶えむの心」」『神女大国文』15集

張佩霞(2002)「含意される格関係からみる日本語の連体助詞「の」」『言語文化論叢』第11号

中村幸弘(1985)「ヨリ・ヘを内包する連体格について」『国語研究』49号(國學院大學国語研究会)

橋本進吉(1948)『国語法研究』 岩波書店

_____ (1969)『助詞・助動詞の研究』 岩波書店

富岡宏太・林田明子(2015)「中古和文の準副体助詞と連体助詞―現代語の準副体助詞との対照―」『日本語学会2015年度春季大会予稿集』

ありがとうございました！